

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	Alethea Hui Qin Koh
論文題目	Positive Emotion Experiences in Negative Contexts (ネガティブ状況におけるポジティブ感情経験についての社会心理学的研究)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文では、社会心理学における感情制御と目標設定の観点に立脚し、悲しみ、怒り、不安を感じるようなネガティブな状況に応じて、いずれのポジティブ感情の目標を設定するのが適切であるかを検討したものである。</p> <p>第1章では、感情とは何であるか、特に感情制御理論との関わりからの説明が行われた。ポジティブな感情は、個人の状態を維持し、不利な状況を克服するのに役立つものとして定義される一方で、必ずしも快感情のカテゴリーに含まれない特定の感情もポジティブな機能を持ちうることなども論じられた。さらにはネガティブな状況下でポジティブな感情を経験することが、精神的な回復力につながる可能性なども述べられた。そして感情制御の一環として、こうしたネガティブ状況下でのポジティブ感情を検討することの重要性が解説された。</p> <p>第2章では、ソーシャル・メディア (ツイッター) 上の英文テキストを分析したうえでポジティブな感情語とネガティブな感情語の関連性を明らかにする研究が行われた。分析においてはポジティブ感情の各ツイートにおけるネガティブ感情 (悲しみ、不安、怒り) の生起率を用い、ポジティブとネガティブの感情のペアの共起を適合性の指標とした。また、機械学習により、サンプリングした全ツイートを横断的に分析することも行った。各ツイートをその後の分析に適したデータに前処理し、ポジティブな感情語を含んだ合計3,165,787件の使用可能なツイートを対象に検討した。これらの感情語の構成要素の内容や意味的な近接性を検討したところ、ツイートにおけるポジティブな感情とネガティブな感情の共起の組み合わせの間にはばらつきがあることが見出された。全体として、怒りの感情は楽しさと、不安の感情は楽しさと冷静さと、悲しみの感情は楽しさ、同情、感動と最も関連していた。</p> <p>第3章では感情の「経験のしやすさ」を測定する新しい構成概念を導入して実証研究を行った。ネガティブな状況におけるポジティブな感情の体験しやすさに関する一般的な認識を調べるとともに、想起課題によって感情を実験的に誘発し、先行する感情状態がその後の感情の感じやすさに影響を与えるかどうかを検討した。研究1では、アメリカと日本での質問紙調査 (N=226) により、感情体験のしやすさに関する一般的な信念を調べた。研究2ではアメリカ人 (N=1,109) を対象に、参加</p>			

者に過去の感情経験を思い出してもらって特定のネガティブ感情を誘発し、その後ポジティブな感情をどれだけ容易に経験できたかを検討した。結果としてポジティブな感情とネガティブな文脈の間で、関連性信念にはばらつきがあることや、文化的背景による違いがあることが示された。また、研究1と2を通じて、感動を感じることは、怒りや不安よりも悲しみとより密接に関連していた。一方で、その他の感情では、研究1と研究2でパターンが異なっており、「経験のしやすさ」には信念と実際の違いがあることが浮き彫りになった。

第4章では、感動という感情に着目し、脅威が生じるような文脈における感動の機能を、3つの実験により検討した(N=1,030)。近年、感動を感じることは、困難の中で生じる肯定的な感情として注目されている。しかし、特に集団的脅威の文脈における感動を感じる機能は、これまであまり研究されていなかった。本研究はこの点に着目し、困難や悲しみの状況において感じられる集団的脅威が感動経験を高め、それが個人の悩みに対する態度を緩和し、より広範で向社会的な機能を促進すると仮定した。研究1では、実験操作と自然災害を集団的脅威の文脈として用いた。研究2と3では、異なる形態の集団的脅威が感動に及ぼす影響を検証し、感動が個人的問題に対する態度に及ぼす影響を検討した。また、研究3では、日米の比較文化も行い、さらには向社会的行動の測定も行った。結果として、社会的影響が大きいと認識された集団的脅威は、感動の気持ちを増加させることが示された。その結果として、個人的な問題に対する否定的な態度が減少し、他者を助ける能力が増加していた。

第5章ではこれらの知見を総合して、特定のポジティブな感情は特定のネガティブな状況に関連すること、ネガティブな感情の経験の種類に基づいて感情の目標設定を行う必要があることが述べられた。また、研究結果の社会的なインプリケーションと今後の課題についても論じられた。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文では、感情制御プロセスの枠組みの中で論じられてきた「ポジティブ感情の増加」「ネガティブ感情の抑制」というポジティブ・ネガティブ両価値を独立に取り扱うアプローチを乗り越え、ネガティブ感情が喚起される状態におけるポジティブ感情へのスイッチのしやすさという、新たな感情目標を設定し、その応用可能性について検討した論文である。第1章にて学位申請者が述べている通り、これまでの感情研究においては様々な形で感情価値に応じた制御を行うことのできる精神健康増進や適応的機能が論じられてきたが、実際にはポジティブ感情とネガティブ感情は連続的なものであり、共起する可能性も知られている。こうした感情の両義性を前提とした東洋的な視点から実証的にアプローチしようとした本学位申請論文は、意欲的かつ、きわめてユニークで、意義の高いものである。

一連の研究からは以下のことが明らかにされた。

まず、ツイッターの英語による感情語の言語的分析を大規模に実施した研究報告(第2章)では、様々なポジティブ感情、ネガティブ感情の共起性とその組み合わせにシステムティックなバリエーションが存在することが示された。ツイッターの内容からは一般的・日常的な感情表現を解析できるものであるが、その分データ解析に至るまでのスクリーニングや前処理、機械学習を用いた検討などの高度な分析手法を用いる必要がある。こうした最新の解析ツールを用いて感情の共起性について検討している点において、本調査は高く評価できる。

続く第3章においては、ネガティブからポジティブへの感情のスイッチのしやすさという概念に注目し、2つの実証研究を行った。研究1では一般的な信念として、いずれの感情の組み合わせが感じられやすいのかについての調査を行った。その際、ポジティブ感情語とネガティブ感情語の個別の感情において、結びつきやすさには一定のバリエーションが存在すること(たとえば悲しみと感動の組み合わせは共起や感情スイッチが容易であると判断されやすい)、さらにはその結びつきには文化差も存在しており、環境あるいは言語にも依存していることが示された。研究2ではネガティブな状況を想起してもらった後に実際にポジティブ感情を感じやすいかどうかという実証研究を行っているが、ここで得られた知見は一部の組み合わせを除いて、研究1と必ずしも一貫しているものではなかった。このことから、本領域においては信念と実際の経験では不一致があることも示された。

第4章では、特にネガティブ感情とポジティブ感情の組み合わせとして顕著にみられる悲しみ・脅威を引き起こすような状況と「感動」という感情の共起性、さらにはその際の感動の感情経験が、向社会性などにもたらす影響について検討した。一連の研究では自然災害など、集団的に広く共有される脅威について喚起された後に、感動が感じられること

があること、それによって向社会性が増すことが示された。学位申請者はこの点について、脅威を乗り越えるプロセスで感じられる感動が、個人的な悩みなどを乗り越えて人々の助け合いを促進する可能性を論じている。この一連の研究はネガティブな状況を人々がどのように克服するのかという点において社会的意義も高く、興味深い知見を示している。一方でたとえば地震や台風などの自然災害ではない場合には怒りなどの感情が生じることで感動が抑制される可能性もあり、境界条件についての具体的な検証が必要であり、今後の課題として残されている。

第5章ではこれらの知見を総合して、ネガティブな感情の経験の種類に基づいて感情の目標設定を行う必要があることが述べられた。そのうえで、研究結果の社会的なインプリケーションと今後の課題についても論じられた。

以上の結果から、本論文で示された一連の研究は、ツイッターなどのソーシャル・メディアの言語データ、調査、実験、比較文化などの様々な手法を用いて、今後の感情研究や感情制御の臨床応用の新たな方向性を示すものであり、当該分野における新たな発展を予期させるデータや理論の提示を行っているものとして評価できる。特に大規模な自然災害など、社会的に共有されるトラウマ的経験をどのように乗り越えるのかなど、本研究の結果が将来的な社会貢献につながる可能性が高く、さらには神経科学的知見などと融合させることで基礎研究としても極めてユニークな視点と方向性を提示している。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和5年1月25日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降